

●山荘生活つづき

ブルグッドさんの山荘は、他の日本人グループや、馬頭琴関係者がしばしば利用するようだ。そういった客への食事の用意や、期間外の山荘管理は隣家のBさんの家族がする取り決めになっているらしい。B家の料理はだんだん上手になったのか、最初から上手なのかは不明だが、辺境にしてはおいしい。朝昼晩、食事ごとにうきうきとB家に通う。おとなりB家までは歩いて200mくらいである。

食事の内容は、日本人の口に合うよう、モンゴル料理よりは、漢民族の料理を主に出してはいまいか？。一度登場した水餃子は大きさが不揃いだったので、B家の漢民族料理は逗留客向けのにわか勉強かなと思った。彼らの料理にすこし、瑕疵があってなぜかほっとした。

日々3食付きなので、ねじが緩みきった生活が堪能できる。テレビ、新聞、お土産屋、電話など外部からの刺激がないので自己希望による島流し状態だ。まあ、たまにはそれも悪くない。食事と食事の間は、それぞれ好きなことをする。歯を磨いたり、ハンカチや靴下を洗ったり、友人とのおしゃべりなどなどで、退屈するでもなく何となく時間が流れる。

ネオン街がないせいか夜寝るのは早く、速い。ひとつには気温が低いこともある。夕食やアルコールで温めた体が、冷めぬうちに、寝具にもぐり込むのである。山荘の位置は、北海道北部の緯度だし、1000mを越す標高なので、日が落ちると身震いするほど寒い。暖房は各部屋に古い公共の建物などで見かけたスチームパイプの暖房と、一部屋のみにあるオンドルだ。そして、熱源は乾燥した「牛糞」でこれをかまどでジワジワ燃やす。牛糞が燃えるさまは特大のお灸のようで、なんだか頼りない火だなーと思ったが、結構やんわりと暖まり優れものだ。

私とAさんが使った部屋は鋼鉄製の2段ベッド6人部屋で、機能本位だから軍隊仕様かと思ったが、学校の寄宿舎で使っていたベッドとのこと。自室をいここカップルに譲ったブルグッドさんと、もう一人の好モンゴル人1名と同室で都合4人で使用。私たちが寝るとき彼らはまだ食堂で小宴会中。私が朝目覚めると彼らはちゃんとベッドに収まって可愛らしく熟睡中なので、まるで早番遅番の2交代、



楽しい車内生活。カボチャのタネ食べ方伝授中。

2部制の寢室だった。

●列車で北京へ

山荘生活はこの辺で切り上げ、旅のもう一つの目的、「列車の旅」に移ろう。

6月6日、前夜泊まった、西ウジムチンのホテルからバスで北京へ繋がる盲腸線の起点、錫林浩特(シリンホト)市へ行った。ここからひとまず内モンゴルの省都、呼和浩特(フフホト)までローカル線に乗る。列車名は「N285/N288次快速列車」。錫林浩特駅出発10:37、終着呼和浩特駅到着21:30、走行661キロ9時間57分の列車の旅だ。

シリンホト駅は市街地から伸びる幹線道路の突き当たりであり、形状は低い箱形の左右対称、白い、長い建物だ。駅近くは石置の広場と、殺風景な空き地、広い道路などで仕切られた味気ない空間となっている。従って乗車までの暇つぶしにお店を見て歩く旅の楽しみはない。売店が駅構内にあるのみで、カップ麺、飲み物、スナックなどが買える。乗客の荷物は空港にあるようなベルトコンベア式の検査機で、安全確認チェックを受ける。検査機には専従の係員が張り付いていてなかなか物々しい。

待合室をのぞくと、乗客は荷物を身近に置いて、赤いプラスチックの椅子におさまっている。待合室はかなり広く、日本の幹線駅の待合室より広くゆとりがある。

やがて改札が始まり、ホームに出るとこれがまた広い。駅舎から線路までサッカー場の短辺ぐらいはありそうだ。ホームのかなたに停止中の列車は長い、ナガーイ編成で、動く万里の長城は大げさだが…。

中国は社会主義国なので、1等とか2等などという不平等な表現は無く、状態を記述することで逃がれている。硬い寝台の「硬臥」、柔らかい寝台の「軟臥」といった具合だ。実際は、階級差別だが*。「グリーン車」のような曖昧な表現は無い。日本ではメニューでも、上等、中等、下等はダメ、「松・竹・梅」など言い換える。

ブルグッドさんに導かれて収まったところは、3段ベッドのコンパートメント。この列車は昼間走るのベッドは使わず、3人掛けの向かい合わせで、6人席。クラスとして



シリンホト駅。駅前の広場はさっぱりと何も無い。



広すぎるシリンホト駅のホームとフフホト行きの列車

は下級寝台の「硬臥」。

いつしか定刻となり、列車は滑り出した。いかにも頑丈そうなディーゼル機関車の牽引で、適度な振動が心地よい。乗車前に仕入れた、酒類、つまみ類を広げる。一行は12人なので、コンパートメント2つで丁度良い。差し入れたり、差し入れられたりで席の移動がしばしば。

窓の景色は草原と、土色の村落が時折流れ去るだけで変化に乏しい。といては退屈かというところでもなく、列車の旅を愉しんだ。給湯設備の場所を捜したり、洗面所やトイレのチェックも車内居住性向上には必要だ。トイレは、昔の国鉄と同じで、「垂れ流し」であった。従って停車中は使用禁止となる。だから、「風水」の理由で窓を開けるのはためらう。テレビ番組「関口知宏の中国列車の旅」で関口氏はいつも、進行方向に背を向ける側に座っていたように記憶するが、理由は「命中」を避けるためだったのではないかとはいえ、トイレのことは中国では普通のこと。それより、列車での禁煙が行き届いているのは上出来の進歩だ。

昼食は、駅弁を購入する予定であった。購入駅の停車時間にブルグッドさんが仕入れに行ったのだが、弁当はなく、代わりにカップ麺を抱えてきた。弁当が無かった理由は、「悪徳弁当屋が賞味期限を過ぎた商品を持って中毒騒ぎがあり、当局がすべての弁当を販売禁止にしまった」そう。悪弁が良弁を駆逐するということだ、残念。

昼時になると、好みのカップ麺にお湯を注ぎ、おなかを満たす。麺だけでなくバナナ、鶏肉の薫製などを食べるのでゴミが座席の下にたまった。中国の列車では長時間乗りづめが普通なので、食事は車中になる。そのため、ゴミがたまった頃に掃除のおばさんが現れ、片づけてくれるのでありがたい。

とうとう暗くなり、終着駅のフフホトに着いた。さすが、省都で、9時を過ぎても駅の周りにはぎやかだ。車にてホテルの「内蒙古飯店」へ行きここで一泊。

●幻の「高級軟臥」

翌7日はフフホト発21:23の北京行きの夜行列車に乗った。「K90次空調快速列車」、北京まで659キロである。全員、最上級の2人用コンパートメント「高級軟臥(462元)」に乗るのを楽しみにしていた。しかし、ブルグッドさんは駅へ行って見るまで席が確保できたかどうか分からない、と

いう。なぜかという、「高級軟臥」はわずか1両、16人分しかなく、一応予約は入れてあるけれど、党・役人の幹部が利用すると予告無しにキャンセルされてしまうとか。駅へ着くと案の定、複数の幹部が北京出張となり、「高級軟臥」割り当ては4人分のみという。皆がっかりしたが、旅を企画したブルグッドさんの心中を思うとお気の毒だ。自分の手の届かないところの不幸だから。

4人は誰にと協議したが、年長者に割り当てるのがよいと、知恵者のS女。この案に従い、STご夫婦で一部屋、T女、O氏でもう一部屋となった。他人同士のT女、O氏はそれぞれ一夜妻、一夜夫と自分たちで言うのでおかしかった。

私を含めた残りの8人は、4人部屋の「軟臥(254元)」に乗ることになった。

乗車時間となって長いホームを歩いて列車まで行くと、各車両には一人ずつ「小姐(女性客車掛)」が入り口で白手袋をはめ、「一切只您満…」と染め抜いた赤いタスキを掛けて直立歓迎姿勢。私たちの車両にも愛嬌のある「小姐」が出迎えた。この小姐は終着まで車両隅にある小部屋に居て、深夜は眠気と戦って通路の腰掛けに座り、窓枠に手を置いて伏せていたりした。むろん彼女は寝てばかりいるのではなく、何かと気配りをして、コンパートメントを点検したり、途中下車の客を起こしたりしていた。彼女とは別に、全車両を「回診」して歩く、制服の違う上級(らしい)の女性車掌も見受けた。両者の間には挨拶、言葉掛けなどのやり取りはなく、中国鉄道の職制を知りたく思った。

4人部屋のコンパートメントはそれなりに快適で、ドアも閉まるし、照明も暗くなる。いつしか寝入ってしまった。

空が白んできて、外を見る。列車は畑の続く台地状の平原を進み、次には台地を割った、峡谷に入った。谷の両側は、石灰岩質の切り立った崖で、線路は地形の弱点を求めて蛇行する。すばらしい景観だが、谷底の流水は、ダムにとられて貧弱だし、水面が泡立っているのはいただけない。やがて渓谷を下りきると、都会の中に分け入り、北京西駅に着いてしまった。到着ホームに観光バスが乗り付けてあるのにビックリしたが、なかなか良い考えである。だが、この方式は日本では真似ができない。なぜなら、日本の駅では線路が行き止まりのフォーク形になっていないから。

こうして無事にオリンピック前の北京へ着いた。ブルグッドさんありがとう。(終)

列車番号、料金などはネットで独自に調べたので実際と違うかもしれません

*)星野博美/著「愚か者、中国をゆく」光文社新書からヒント。



K90次空調快速列車「高級軟臥」用カード式ドアロックキー